

毎日の保育問題 (五)

上 澤 謙 二

九 出ようとして引込んだ子供

『言葉でいふよりは實行で示せ』、『口で命するよりは手で動かせ』は、保育道の原理のやうにいはいはれてゐる。まことにさうにちがひない。ところが活きた實際の交渉になると、偶には例外の場合がないではない。

子供達はサークルになつて、先生さいつしよに『結んで開いて』手を動かしてゐる。

ただ一人、サークルからぬけて、お母さんのそばにひつついて、みんなのするこゝを見てゐたKちゃんの上半身が、ほんのわづかながら前へ乗り出してきた。それは特に注意してゐなければ分からぬくらゐの程度である。

けれども注意してゐた先生は——さうしてもお母さんのそばを離れない、みんなの中へはいらないKちゃんを、さ

うかしてはいらせようま注意してゐた先生は、この有様を見逃がさなかつた。

「こんなことは初めて。さうく興味を湧いてきた見える。よい機会、これを逸してはならない」

さつそくそばへ寄つてきて、親しさを表はすため、しやがんで、Kちゃんの顔と自分の顔を向き合せていふ。

『面白いわねえ、Kちゃん』

さうするまゝ、Kちゃんの頬に、ほんのかすかだが、ほほゑみの影がただよつたやうに見えた。

「好調だ、この氣持に乗じて、今日こそお仲間へ入れよう」

さう思つた先生は、言葉をつづけた。

『なあ、いらつしやい』

「おお、少し腰が浮いたやうに思はれた。」

「もう一息！」

先生は手を出して、Kちゃんの手を取るをひつばつた。そのまま立上がつて来る——「さ思ふさ、これはしたり、ただよつたやうに見えたほほゑみは忽ち消え、浮いたやうに思へた腰は忽ちドッカミ落ちついてしまつた。さうして首をちぢめ、手をちぢめ、身體までちぢめてしまつた。

「まあ、さうした……？」と思ひながらも『いらつしやいね、ほら、みんな待つてゐるわよ』と、猶も手を曳く手應へがある。反對に引込めようとするのだ。

『さあ、いらつしやい』

見兼ねて、お母さんもうしろから手を添へるをKちゃんは下をむいて無言のまま頭をふつて、身體をうね／＼させた。これ以上やれば涙も出し兼ねまじき形勢である。

それで先生は斷念して引上げる。『結んで開いて』は、又にぎやかにほじまつた。

それをしながら、先生はそれもなくKちゃんに注意してゐるを、お母さんにかじりついて、半身をその袖のかげに埋めるやうにしてしまつた。明かに状態は前より悪くなつたのである。

なぜか？

たしかにKちゃんには、お友達にしてゐることを對し

て、今までになく興味が起つたのである。或は「はいらう」をする欲求も起つたのである。それは先生が見て取つた通りである。けれどもそれは極めてかすかなものであつた。未だ意志活動がはじまるまでに到らなかつた。だから強弱多少いづれにせよ、或る接觸又は刺戟に堪へない有様だつた。それを受入れるよりも、寧ろ忌避する状態だつた。だから先生の折角の「手」は、助長するやさしい誘導にならないうで、壓倒する強烈な刺戟になつてしまつたのである。Kちゃんに取つてはその手は「渡りの舟」さもないべき救ひの手でなくて「拉し去らうとする」恐ろしい手に見えたのである。

なぜか？

一言でいへば早きに過ぎたのである。もつと待つて、「はいらう」をする自發的動機がはつきり起つてくるだけの時間を藉せばよかつたのである。ただこの一つ——わづかな一つのために、こんな意外な、期待はずれの、反對現象が導き出されたのである。

「機會を逃がすまい」としたことを「口より手」を進めたこと、いづれもお母さんのやつたことを誤りはないが、「自發的ならしめる」場合には、往々にしてそれが或は早過ぎ、或は行き過ぎになる。殊に内向的な消極的な子供を「自發的ならしめる」場合にさういふことが起るのである。

先生はひきり考へた。

『ピチ／＼育ちつゝある子供の問題だもの、所謂一般的原理で一から十まで規定しきれないところがあるのは當り前だ。寧ろさうでなければふしぎだ。それこそ『活きた保育』の意味も、興味もあるのではないか。』

一〇 ひとりて積木を片づけるまで

「Iちやんが立上がつて、バタ／＼ミかけ出した。あまには例によつて積木が縦横無盡に散亂してゐる。」

『Iちやん、Iちやん』

先生が呼ぶまゝ、Iちやんは立ちまゝまつてふりかへつた。

『これ、お片づけしてから表へゆくの』

『ううん、あまで』

さういつてかけてゆかうとする。この子のいつものやり口だ。

『ちよつこ、ちよつこ！』

先生が聲を高めて呼びかけたので、Iちやんは又立ちまゝまつてふりかへつた。

『あまでおやない、今お片づけするの』

Iちやんは額に八の字を寄せて、だまつてそこへ突立た。しばらくそのまゝ——。やがて先生の方から近寄つてい

つた。そこでIちやんの手を取つて『さあ、いらつしやい』といつて、その場へ連れ戻してくるのも、たしかに一つの方法である。

けれども先生はさうしなかつた。相變らず言葉でいつた。

『Iちやん、このあひだ先生はお約束したでせう。積木で遊んだら、あまをきつこお片づけするつて』

Iちやんはやはりだまつて立つてゐる。

『お約束の通りにするね、Iちやん、お片づけできるね』
けれどもだまつて立つてゐる。先生もだまつて立つたが、やがて又いふ。

『今日はお片づけするでせう。みんなによくできるか、先生に見せて頂戴』

まだだまつて立つてゐる。

先生は手がムズ／＼するやうな氣がした。ちよつこ仲ばして相手の手をつかまへて引張つてゆけば、それで一気に問題は解決される。けれども猶も言葉に據つた。ちよつこ間をおいて又いふ。

『Iちやんがお片づけしたら、先生はびつくりするよ。みんなによくお片づけするか知ら』

Iちやんは相變らずだまつてゐたが、顔を擧げて散らばつてゐるまゝを眺めはじめた。それはそこに思が向いて

きたこのしるしではないか。

そこで又『さあ、ゆきませう』と聲をかけて、手を取つてゆきたくなつた。きつと素直に、否進んで連れてゆかれるだらう。

けれども、先生は飽くまで言葉を用ゐた。ちよつと間をおいて又いふ。

『さあ、ゆくかな』

タッタツ、Iちやんはかけ出して、もこへ返る。

『まあ、えらい』

バチバチ、先生は手をたたきながらそのあごについて、その場へゆく。

この場合、手を取つてすれば、手續きとしては簡明で、結果は靦面に現はれよう。然しそれだけ強制的な調子が加はる。従つてそれだけ自發的な色彩が減ずる。

より純粹な自發的動機乃至行爲を相手に創り出し導き出さうとする時は、手よりは寧ろ口である。身體に觸れて動かすよりは、心に訴へて考へさせることである。前者に他律的要素が多いのに比して、後者は自律的要素がまさつてゐるからである。

先生が一言葉々々をわざと間をおいていつたのはこのため——相手におのづから考へる時間と餘裕とを與へるためである。言葉をつゞけてたゞみかけていへば、何となく叱

るか責めるやうなふうになつて、服従か反撥か、どちらかを生ぜしめるほかない危険におちいる。それを避けて、出来るだけ純粹に近い自發的狀態を齎らすためであつた。

Iちやんはだまつて片づけはじめた。けれどもそれはもういや／＼な反抗的なだんまりではない、當面のことに、心を打込んだ忘我的なだんまりである。活潑に正確にうごくその手を見よ。散らばつたものは／＼なくなつてゆく。

自發的にされたればこそ——言葉によつて導いてゆかれたればこそ、こんな活潑に正確に行はれるのだらう。

手によつて連れてゆかれたならば、同じく片づけるにしても、こんなに活潑に正確には行はれなかつたらう。

『言葉でいふよりは實行で示せ』

『口で命ずるよりは手で動かせ』

こは、保育道の原理のやうにいはいはれてゐる。まごころにさうにちがひない。まごころが活きた實際の交渉になるに、偶には例外の場合がないではない。